



西行杜子美を誰を
體となし多む此不し
録取とて一家乃か
を那し未法ハ芭蕉
於す別ち果けり
抄さ那ハ時又あて
多し



非書月二六

手しつ夫しつ我の珠磨
をくまき枝一人くもあ
けく枝とひり出つる
我心家くおれか、い
と〜のちのちのちのち
おもくさ又あ〜は

銅をうみ〜今を
うもよ響い〜枝
ま〜か〜夫と〜去来
許六々かよ〜け〜あ
六乃向答もみ〜枝
〜の〜我〜何也

寛政庚申冬

洛陽 竹巢月居序

純諧同養卷之壹

贈晋氏其菊書

廣披舎去來



前文略
 故^前得^奥與^冊此^新脚^{より}初^人報^えを^由ひ^と乾^賞門^に在^る
 猶^すて^小一^變に^成り^て一^切を^切て^去り^しを^得たり^とい^ふ
 校^と落^材舎^に交^りて^器を^得たり^とい^ふ
 と^は是^也と^の後^すに^ひし^の此^新風^を起^する^乾賞^門に^在る^依
 續^接養^をり^去來^同云^師に^同雅^見に^於て^ある^に類^を
 あ^らむ^をり^実を^しる^の重^てより^心未^志を^く
 愛^しむ^門人^との^流れ^に沿^へん^事を^おり^負り^君

河野幸一ありこれと約ふらんを疑
りれみははぶ面を志り世をたぬ海ありけり
てむちうーを四とせれ考り秋を信そり
雲重なりうーみをいせりとい魚也
霜はれよをいせりといりふり
也ーいり 案下に柱ら野先生これ
をいんと志強
ふれ也

去来書

其菊先生

按石下

照彦按去来書

森行六

千歳不易一時流形此ぬをそつそ晋子
と後せら流しう福て其菊の菊を
まはる菊有る生得物ふら流し
得し志強志しにありて
志しめいなる志うりとい
相撲を晋子かこれに志強
向るれらうと晋子也かれお
そや亡師れ向ふ志強して
志強の門て高直れわやうり

非皆司六文

何て知らし神のまことばありしと云ふに別者此
 眼ありて一俤をわく何神能くよふんといふ言
 こそまことばなりしと云ふにこそ神能くよふ
 流行たうれき不易流行のまことばなりしと云ふ
 是能く神能くよふ言なりしと云ふにこそ神能く
 予終る流行不易と云ふ言なりしと云ふにこそ
 向ひてしなりしと云ふにこそ神能くよふ言なり
 きなりしと云ふにこそ神能くよふ言なりしと云
 かけ候といふ言なりしと云ふにこそ神能くよふ
 まことばなりしと云ふにこそ神能くよふ言なり

流行不易を貴しと云ふ言なりしと云ふにこそ
 と云ふにこそ神能くよふ言なりしと云ふにこそ
 考ふにこそ神能くよふ言なりしと云ふにこそ
 不接能く神能くよふ言なりしと云ふにこそ
 流行不易の言なりしと云ふにこそ神能くよふ
 こそこそ神能くよふ言なりしと云ふにこそ
 と云ふにこそ神能くよふ言なりしと云ふにこそ
 志ありしと云ふにこそ神能くよふ言なりしと云
 何の言なりしと云ふにこそ神能くよふ言なりし
 志ありしと云ふにこそ神能くよふ言なりしと云

その師の末と云うるをうぬり及んば筆を法にすはして
志れを執るに之の難^らく隠密に事しゆと云ふ抄よむに
諸の如暇ふささし白段を法しむきよりありて
大孝ありん然るもハも身^可く空りりさるる内
と合せし慈門をうとん大款が防たあへ

去来先生

抄在下

新六海

答許子同難辨

廣披舎去来

湖東外洋六難乞^可其角に於く教文をよみそ難
辨を著しこのあり予小わさるる難まことふ風流

能人なりその肯ぬくしてこれ諦言し予ふあ
あくる魚初し從者れとも尚言をぬく事これと
糸は是流のこくたき難乞^可あへ
○ 本書曰ふ衆不易一時流形れ物し何を以て晋の
う本情を諦せらるる意て其角々難を金すしく初り
き由りう難ゆ人たり生得そのふく難くめらるるを
しるく人れ辱志を志しに在ふ是答のこもなうて如
急門て辨を免くし其葉集れ序と此是を以し一覽
とあらぬあり

△ 去来曰この難難乞^可言あり予まこと於るふありて

非皆問答卷之二

是を傍觀これを見一て洩さざる蓋たし一志つゝくを名
とり一をくらし

○来書曰志つゝと云ふも三神とてけて相撲と晋子と云
ふ立合又諸門兼れ白とあねと云

△去来曰雅見れ言伝正金一平中と云れお同一文中之
かち見その眾一あま更なるれ

○来書曰惟お眠を破てん然お進年此法集れつら
同く向あれおとと晋子也

△去来曰雅見乃云感心せぬいほれ如おふく角くぬれ句
あし一せと見也 平進年雅書に練一を向くか

変れ書角く句十中して書正人死との一二を此余ハ世乃
平くれ句なり信化集又角く撰集書角句紙たうし
書見そのうち雅見乃白れ市獨角く句如く是れり
その條ハ感心と云れを見ん

○来書曰くお小ほく色又つ角も見ん

△去来曰これ於そくく雅見れと論ありん角く
方れ大中見を以て編せ月家加れと見と云
ん角く白れ中一死中門て論せき感れと脚
見んおんや後哲人をも也 平中これをも云
此同く白れお小ほく色又つ角も見ん

非語調書女卷二

龍見毛その一人也

○本云曰ちんそ也亡少れ句小對してひきり加
んと論りし龍はう角にてさうまれあやゆり
といはんや

△去来云この龍見れ論精密なり角す龍
龍文ふかゆりてゆれゆれとひきりしと云なり
見ゆれまに力を加へたる人一日ふ二十里とあり
去来者あり又十里を東行す龍そのあり於よ
はと云とももゆれを舟し角はゆれゆれす
龍者ふありゆれ昔日去来曰ゆりゆり名いふ

龍見をゆていよく昔ふ言志りしゆり龍てふか
れ神ふの龍人月夜舞や去来曰ゆり言もま
裡あり小言意味たなりとありとゆゆとも
去来をさゆりて古人ふゆりりりりりりり
角す師とひきりし龍事とさゆりりりり
○去来曰ちんそありゆれゆれゆれゆれゆれ
去来ゆりりりりりりりりりりりりりりり

△去来曰ちんそありゆれゆれゆれゆれゆれ
ゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ

びりあ〜はかくのてそれ血脈をう〜するその
 お〜んひとりそれこそ〜に〜に〜又心〜秀心
 何れ事は先師在世れうちをいふと〜師化た〜
 んま〜運化れのちた〜言は言ひ〜とせんを
 志すれと今れ世にありて毛秀逸成行〜むり親
 人誰とやむ〜先師凡世にほけて曰一世れうち秀
 逸所向之あり〜人々遊者也十句不捨よらん人々
 名人を重んず〜先師ひら〜れ句乃奥意にかたうぬ
 その前師免さ〜忘〜ん〜を師ふ〜れを答のふ
 支那の言は〜は〜人たり極ありて〜名力は文と

の集は覚か〜りき師あり 予曰わ〜句撰ふ〜師あり
 向い〜ありや先師は〜なんち合れ〜と云
 ありは師そ〜交り師そ〜と云れん向ふ句をら
 き師ものは師也た〜を師て捨り〜師と云
 秀逸といふ人毛世にま〜師あり〜師は先師
 の心人れ句を考〜を師とや相あり〜師考多あり
 思過かれ〜や〜あり門人あり〜捨ひてある毛
 是ま〜と云る〜〜なりて終ふ師のれ〜位と〜
 らは師人もあり師〜半途よ〜み〜師ありんて
 捨〜む人ありあり不〜〜もありひ毛秀逸

非比問答抄卷之二

十

ときし一ありれるを句をいひすせんやこれを常
 に祇うといはんはむなりまことおれをたうふ
 師よりいひせんきよりこれいひせんはむなる
 なるんかこれいひて満せばまわつたうを法はま
 んめれたういひまうの性人れ句をいひて海り見
 海り見もか海りて海り一いひ言せんをまう初
 人れ作者のいひて海りて容易にいひて海り一いひ
 つて其いひて新いひて海り一いひて海り一いひ
 一いひて海り一いひて海り一いひて海り一いひ
 海り一いひて海り一いひて海り一いひて海り一いひ

ときし一ありれるを句をいひすせんやこれを常
 に祇うといはんはむなりまことおれをたうふ
 師よりいひせんきよりこれいひせんはむなる
 なるんかこれいひて満せばまわつたうを法はま
 んめれたういひまうの性人れ句をいひて海り見
 海り見もか海りて海り一いひ言せんをまう初
 人れ作者のいひて海りて容易にいひて海り一いひ
 つて其いひて新いひて海り一いひて海り一いひ
 一いひて海り一いひて海り一いひて海り一いひ
 海り一いひて海り一いひて海り一いひて海り一いひ

あり

△去来日雅兄此言感佩至矣一者此とも免
 ましてやう然るものは生得なる有り雅兄此心
 風證ありてしもききまけむ更切なりをまはる
 事一ありんその次は於てえられハ心さらんこれ
 在る抄り人ともやうに蕉門此後生を万人者をも
 何て論す然るは先師一ありて然るの多し一ハ
 まはらひし何れとやう然るのま人をさうは多く
 是のたもは所聚人や雅兄世評その何てかんと
 主人生われ人これに補ひるを名人にせう人し

聖ハ孫人きてふやうありて古人の語言ありてまや
 ○来書曰くををかしらまひ志何れと作思まらん
 真此 雅兄此あり

△去来日雅兄此言的中なり去来も然かたりて是を
 得る雅兄此をかしらとせん強する 去来も業を
 てこれを知るは踏通つる向れ去来くたうらん
 ををかしら雅兄とらるを用ひ補ふと又同日此
 論ふあり

○来書曰く一旬れまうこみまふありては其のま
 能きまあり

△去来日之論雅名と於り之は難。甚しむるや多端
 真徳よりい來教人々名客その向は津水の雄藩のまか
 たることせんあつれとも宗因をらひしめて片は徳
 孝り先師は次龍起りて信徳七百餘於てそりて
 師愛風に於り難もこれし粟生しそ次龍は此
 能日之く之れし粟生を此日をも信善不於これぬ
 猿蓑を此信徳不破しれ孝りそれ用於て能ふ
 これをそのて先師は一時流於此名をそりて用於
 此のりかそりし此句あり難也これをそりてそ
 不易此号を起りてあつれとも此の不易なれす

孝のそれ況をんと此れをの難人ありとせん

○去来日之易流於此端のりしそりて易と云
 此のりそりて難白もかす此句作しそりて
 此のりそりて易此句をせん此のりそりて
 此のりそり

△去来日之の事、此のりて此のりて言
 此のりそりて今も此のりて此のりて言
 此のりそりて此のりそりて此のりて言
 此のりそりて此のりそりて此のりて言
 此のりそりて此のりそりて此のりて言
 此のりそりて此のりそりて此のりて言

のすゝもあゝも今 晴ふ別看れほるこもりさう
と解を分り行解法くあふゆんぞいふ事おあそこを
を胎やゝくゆゝん

△志業曰く此後難免此よりあまぢう 解く風を
きふありまの流形ハ風なり十解を解也解ハ
古今に押^押わたりて用控なり一風をうたふ用控あ
里万葉風古今に風新古今乃風此よりさうさ
わたり一人の風あり流形ハこの風の風なり
流形ハこの風あり流形ハこの風の風なり
あゝこれ解とゆゝんも又あゝ一あゝこれと解ハ

柳の北一解より向かう一風を晴く此風ふり
解をよめてて一已れ向かう 解ふ向を
を望みく此風ふり一風を晴く此風ふり
あゝ一あまぢう易なる一風を晴く此風ふり
はまゝ一曰和字一もいはれこの風をよゆん
あまぢう一後より解法ハ和言ハ今乃世ふり
ふの解ハ一風を流形ハこの風の風なり
を望みく此風ふり一風を晴く此風ふり
流形ハこの風あり流形ハこの風の風なり
西解ハあまぢう易なる一風を晴く此風ふり

そくそく性乃風流をたはしそこれふもさうりあ
や神たうさうれの神續んさうりあさうりたのり物
あは能流それう肉もそ合架初會さうれうさ
地のく西風神をよゆんとさうりあさうりあ
さうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ

と大慨^{たがひ}惚と驚へさうれとも和おにうさうりあ
さうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ

○未書日之来さうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ

△去来日後さうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ
あさうりあさうりあさうりあさうりあさうりあ

をいふと知てさきの句もあつてふたふたあ
らん

○本書曰前々流行不易をきくといふ世に

△去来曰この論難をいふは是れよくんか勿論なり志
れよくも難を志すといふれを考へて海人難をい
今日志すふまをいふ所を古今此風をわくは
あれを海をいふ海をいふもいふ海は今日此風をま
をいふ海もいふ今日此風をいふもいふ海は今日
と昔といふもいふといふといふといふといふといふ
此昔日此風をいふといふといふ今日此風をいふ

をいふといふといふの流行ふまをいふといふは是
此風はこれに類しそのはさきの言はれは流行
をいふといふ今日此風をいふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふ

○本書曰この言をいふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふ

△去来曰難をいふといふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふ

○来書曰能修りて善惡は少治しし於よりか若中時撰者
此を撰りしに其の能をあれども不於それお遠加
かりしむれあや侍りかそつれよはゆる由なりと云れ地
口より辨せし方去来云れあやまりとゆはし
ゆしんもむへなりん

△去書曰此ふとく事し今儲方撰集そのゆは
る能その予の衆を得んとて近年海虫の枯らぬやわれ
あれを去し能きし治化集はくゆへとてこれをも
くもし信化集とあやまり多し是予の衆のれ
うしその他が家ありしに其の門のさるる因し所て

ふも我世人とんと衆を予を人よとんや或京師より在也
いふも物も諸生此度ふありしに其の書も其の書
野明長堂の此書即ち七社奉新の故ありて予これを
教訓を其余を予のありしゆりしゆり

○来書曰秋兩戒此夷時を得く吹を寂ひ以てふと
思かゆし能集を撰りしに其の書も其の書
きりし書もそのとくしを防る事ゆふゆりや

△去来曰先ふ云くしんんと世人此れとたりと云ん
やのゆりしを文に言ふも其の書も其の書
法をけりしゆりしゆりしゆりしゆりしゆり

湖をうらるる

○ 本世の世に於ては言ふ者一流に此世を弘むるのみならず
一〇 聖人の言ふももていふて流音と引く此世の如
きもくもくわくは此世に於て一生喜ぶ此世を弘むるのみ
一向も有り 蕉門の内小の世に此人を深らば此世
△ 去年白雅兄世に於て評「此世」といふもももくもく
此世一生喜ぶの世に於て一〇 聖人の言ふももくもく
く海と大波と此世に於て一〇 聖人の言ふももくもく
去るに於て人は志ありて此世を大害とせん此世に於て
是世に於て一〇 聖人の言ふももくもく

〇 世に於ては言ふ者一流に此世を弘むるのみならず
一〇 聖人の言ふももていふて流音と引く此世の如
きもくもくわくは此世に於て一生喜ぶ此世を弘むるのみ
一向も有り 蕉門の内小の世に此人を深らば此世
△ 去年白雅兄世に於て評「此世」といふももくもく
此世一生喜ぶの世に於て一〇 聖人の言ふももくもく
く海と大波と此世に於て一〇 聖人の言ふももくもく
去るに於て人は志ありて此世を大害とせん此世に於て
是世に於て一〇 聖人の言ふももくもく

非世同本世

七

此書の編定は龍徳二年より其坊の巻送入りと云ふ所は
まことに自歎^{の心}の人をきくことなる者あり

○来書曰たよ近年よりこの市に集積するものあり
世に不^レ思^ハを睡^レるも亦この惟我坊の衆なり

△去来曰たれ罷りて惟我坊の四方より脚
と云ふとも其徒集を撰ぶものあり一集
を撰ぶ者を志願するは坊の助を成る志ありと坊
のくろくは不^レ叶^ハま^レりて通^レれわ^レす^レぬま^レり豊後此
集るものハ惟我坊の子部より志^レれともこの来坊の教
ありより先^レ草^レ行^レ後坊の不^レ思^ハか^レり^レと云ふ

ま^レり其^レ坊の統の集り

或曰る後の集りて極^ニ出^ル世に不^レ思^ハるは其を惟我坊に
此後の集りて其来より其集りて極^ニ出^ル也

○来書曰た是れ世に流るはま^レりといふは是れなり

△去来曰た彼坊不^レ思^ハるをてこのま^レり

○来書曰た惟我坊より其^レ坊の情より惟我坊を流^レ
里金山の徳合新^レ度^レに名^レ月^レれ^レ自^レを^レあ^レり^レも希^レくも
ま^レり^レ言^レ人^レも^レこの^レ大^レ方^レ同^レ門^レ他^レ門^レも^レに^レ不^レ思^ハる^レ見^レ他
例^レれ^レ置^レ物^レも^レや^レし^レ竹^レの^レ是^レ衆^レも^レ少^レし^レん^レを

△去来曰た難^レ言^レ感^レ歎^レ也

○来書曰た^レ親^レ自^レ未^レ結^レなりといふは一流^レれ^レを^レ加^レの^レ不^レ柱
めて^レ是^レ大^レ款^レを^レう^レけ^レて^レ一^レ方^レ法^レを^レう^レけ^レる^レ大^レ軍^レれ^レ何^レの^レ先

加けて一事不討死せんす此志強石れこ

△去来日勇者を覚るこはこ義の義ありこは難急の習を
此習を義者かたうこは勇ありこは難急の習を

○去来日故不同門れを極こおとたりと願はせ難を法
備はしてこれ起はされ難程深き此度不及沙法
諸は此眼よりけりこ白塔を法しむをよりこ
らは大業なりん

△去来日難急道は志き此の深見この言ふは難を感
候はるは他日湖南の文章十先西秀先不照りては
こは此遊諸をゆん

○去来日願ふは事多しと世よりくるを合せしむ難を

固くして大敵を防犯をぬ

△去来日難急は言勇法人一統とも事々性も弱
して敵あはれ難あはれ難て十月のそは難より心虚
勇急を急病は今日甚あはれこは向來難を引
手は振力かた人章強下は弱あはれ益兵を事は陳
を纏て大敵は破りき人難急は此は難急は事小難は
忠臣一方の大將軍也

藤根舎堂先生志来也

元禄丁丑十二月日

みる井 新先生 名

上病後精力未全是故けし書風國を物清く仕ひ身
熟字を多し新文等法を以て披見して下作程法を
明くし加へる物を重く以て其意を夢夢度もの也

縦緒問答抄巻之二終

天地窓門抄

全部二冊

天地日月風雲雷雨地震龍火方位鬼神の深奥秘法
權利地獄極樂之事北野の夢人のまろく如女お仕る温
池水血まじり高山煙立谷音龍宮の鏡そのほり世ふら
し合点のめりまじり妻しくとけとまじりくわたり
尤も月まじりを月の光るまじり。水の精とまじり。月能
る月能の由來おのりけ返りまじりくまじり余に准て如ぞ
此抄をいへるまじりまじりまじりおおまじり大まじりまじり

明袁了凡著

浪華南里亭主人増補

和陰陽文繪抄

全部二冊

東武善飾戴斗画圖

此書は陰陽と経一十の陽報とあるれ書と
なりて福と命との五十進子なる人。功德の
報よりて教の世進とに及ぶ初分自き合
箇中の身とより又六積照の世と清事相澤
の括括とけ後と如見女のまじり安く押合も
白長母がまじりまじりまじりまじりまじり
る中用定まじりまじりまじりまじりまじり
画家好くもまじりまじりまじりまじり

